「恐れ」そして「恐れず」　　詩篇 46:1～3

詩篇 46 篇は、いつの時代も愛されてきた詩篇で、特に、困難な時に人々の慰め、励ましとなってきました。宗教改革者ルターはこの詩篇から今日の賛美「神はわがやぐら」という讃美を作っており、それは宗教改革を導く歌となりました。2001 年 9 月 11 日、米国で同時多発テロが起こったとき、アメリカの多くの説教者たちはこの詩篇を引用して人々を励ましました。また、2011 年 3 月に起きた東日本大震災のときにも、この詩篇がよく使われました。今、私たちは自然災害やテロ災害とは違ったパンデミックつまり感染症の爆発的増加による恐怖と不安の中に置かれ、私たちの生活や社会が一変してしまっています。

そしてコロナ・ウィルスの感染拡大は社会、経済あらゆる方面に影響を与え続けています。今までは感染予防に力が入れられていましたがこれからは経済、雇用、仕事、生活に困窮する人が増加することが確実に予想されています。今、私たちは、自然現象ではありませんが聖書の言葉通り、「地が変わり、山々が揺れ、海のただ中に移る」ほどの変化を目の当たりにしています。コロナ禍に見舞われることは確かに生まれて初めての体験です。しかし、いつまでも初めてとばかり言っておられません。もう一度、この時代に生きる私たちに神様は聖書を通して何を語りかけているのか耳を傾けたいと思います。

「恐れ」といっても、かならずしも、恐怖のあまりすくんでしまうということばかりではありません。「恐れ」は、まずは、「思い煩い」となって表れます。ニュースを見聞きしても、最初はいつも「コロナ」関連ですから、ほとんどの人が、「コロナ」の情報をかきあつめ、マスクや消毒用の薬品などを買いため、感染者数のグラフを毎日チェックしては、その数字に一喜一憂しています。買い物などに出かけるときは、マスクをつけ、手袋をし、帽子をかぶるなど、身支度して出かけなければなりません。家に帰ってきたら、着替えて、手洗いをし、うがいをします。外出は減りましたが、外出の前後にしなければならないことが結構増え、そのため、日常の生活がかえって忙しくなったとも言われます。

人の心には、ものごとを受け入れるのに一定のキャパシティ（容量）しかありません。その中にあまりにも多くのものが入ってくると、心が乱れてしまいます。ルカ 10:41 に「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを心配して、気を使っています」というイエスの言葉があります。「心配する」と訳されている言葉は、誰かのことを心にかけるという良い意味でも使われますが、「気を使う」という言葉は、決して良い意味では使われません。それには「心乱す」「おびえる」「動揺する」「妨害される」「秩序を失う」などという意味があります。ですから、心配することは一概に悪いとは言えないのですが度が過ぎて気を使い過ぎると他人や自分の心や身体に悪い影響を与えることになります。

ある時、イエスは会堂管理者ヤイロの娘の病気を治すため彼の家に向かいましたが、途中で娘が亡くなりました。イエスが家に着くと人々が泣き悲しんでいました。マタイ 9:23 に「イエスは会堂者の家に着き、笛吹く者たちや騒いでいる群衆を見て」とありますが、ここで「騒いでいる」と訳されている言葉は、ルカ 10:41 で「気を使って」と訳されているのと同じ言葉です。これは使徒 17:5 では「暴動を起こす」と訳されています。 またイエスと弟子たちを迎えたマルタは、彼らをどうやってもてなそうかと心配しました。マルタの気配りは彼女の長所でしたし、「旅人をもてなす」ことは神に喜ばれることでもありました。しかし、マルタは、そのことで心を乱しました。「気を使う」という言葉の原語には、「警報におびえる」という意味もあります。マルタの心の中に、消防車や救急車のサイレンが鳴り響くような状態が起こり、彼女はパニックになったのです。

こうした思い煩い、気遣いが繰り返されると、それは「不安」に変わります。思い煩うべき状況が改善されても、それが去っても、心が落ち着かなくなるのです。今、大丈夫なのに、そのことに安心できず、同じことがまた起こるのではないかと、たえず心配になるのです。そして、「不安」がこうじると、それは「恐れ」となり、「恐れ」は私たちを捕まえ、私たちの人生を誤らせるのです。

ですから聖書は私たちに「恐れるな」と言います。世界に恐れが満ちている今以上に、この言葉を必要としている時はないと思います。

しかし、「恐れるな」と言われて、それで、すぐに「恐れ」が無くなるわけではありません。そのためにどうすれば良いのでしょうか？　それにはまず「神を恐れる」という段階が必要です。「恐れるな」というのは、何をも恐れないということではなく、神を恐れることです。神を恐れることによってはじめて、「恐れ」が取り除かれます。イエスはこう言われました。「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはいけません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」（マタイ 10:28）人は、「私は何も恐れない」と、どんなに表面で強がっていても、心では恐れにとらわれています。人は、この世界で主権者ではなく、全知全能でもないからです。私たちは何か持っていないと不安です。今持っていても失いはしないかと不安です。さらに将来持てるかどうか不安になります。しかし、神は、この世界の創造者、全知全能のお方で、すべてのものを支配しておられます。神を越えるものは何ひとつありません。神を恐れる者は、神によって、私たちを恐れさせる、あらゆるものの上に立つことができるのです。

多くの人が、神が恐るべきお方であることを見落としていますが、聖書は、神について、「あなたがたの神、主は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神」（申命記 10:17）と言っています。神は、侮られるようなお方ではありません。実際、神が人々に現れるときには、いつも恐れがありました。モーセが十戒を授かるときそうでした。聖書には「民はみな、雷と、いなづま、角笛の音と、煙る山を目撃した。民は見てたじろぎ、遠く離れて立った」とあります（出エジプト 20:18）。それで人々は、モーセに、「私たちに話してください。私たちは聞き従います。しかし、神が私たちにお話しにならないように。私たちは死ぬといけませんから。」（同 19 節）と言ったのです。

このことは、新約聖書でも同じです。ペテロはイエスの奇蹟を目の当たりにしたとき、足元にひれ伏し、船底に頭をこすりつけ、「主よ。私のような者から離れてください。私は、罪深い人間ですから」（ルカ 5:8）と言っています。イエスの奇蹟に驚くよりも恐れかしこむ思いが強かったのです。

現代は、神を恐れない時代です。神を「おそれ、かしこむ」畏怖、畏敬の思いが無いだけでなく、神を怖いとも思わなくなりました。「神がいても、私の助けにはならないし、いなくても困らない。人は死んだら終わりで、死んでから裁きがあるなんて信じられない」と言うのです。それで、人は、悪い事、不正なことをしても平気になりました。イエスが、「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはいけません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」（マタイ 10:28）と言われたとき、それは明らかに、神の裁きのことを語っておられます。私たちはひとり残らず、人生の最後の時に、神の裁きを受けます。それだけでも、私たちは、神を恐れずにはおれません。まず神を「恐れる」ことから、神を恐れかしこみ、神以外の何者をも恐れない人生へと導かれていくのです。

詩篇 46 篇は言います。「われらは恐れない。たとえ地が変わり、山々が揺れ、海のただ中に移るとも。」「われらは恐れない。」力強い言葉です。この詩を書いた人もまた、神を恐れる人だったのでしょう。神が「大いなる恐るべき神」であることを、知り、信じていたので、そう言うことができたのでしょう。たしかに神は「力あるお方」です。神はすべてのものを治めておられる「主権者」です。けれども神は「独裁者」ではありません。「神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある強き助け」です。力ある神が、私たちをかくまってくれる避け所。力強い神が「そこにある…助け」なのです。あらゆるものを越えて高くおられるお方、すべての汚れから無縁の聖なるお方が、人々のそばに、手の届くところにおら

れて、「守り」となり、「助け」となってくださると言っています。

なぜ、そんなことがありえるのでしょう。それは、神が、愛の神だからです。神の愛には限度がありません。たとえ私たちがどん底に落ち込んでも、神はそこまで降りてきて、私たちを拾いあげてくださいます。人間の愛は、熱くなったり、冷たくなったりします。時が経てば変わります。しかし、神の愛は、永遠の愛です。不変の愛です。人間の愛には偽りがあります。親切そうに助けの手を差し伸ばしても、その親切や援助が純粋なものではなく、それによって人の上にたち、人をコントロールしょうとする人もいるのです。しかし、神の愛は違います。神の愛は、どこまでいっても愛です。神の愛に、表も裏も、外側も内側もありません。全部が愛です。

ペテロは、「からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません」との教えをイエスから直接聞いていました。ところが、大祭司の家の中庭で「この人も、イエスと一緒にいました」と言われたとき、彼は人を恐れて、「私はその人を知らない」と言いました。捕らえられたイエスがそこにおられた、その場所で、ペテロは自分の主を「知らない」と言ったのです。ところが、イエスはそんなペテロを赦し、受け入れてくださった故に後にペテロは、人を恐れることなく、「神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」（使徒 2:36）と説教する者となりました。ペテロは神の力によってだけではなく、神の全き愛によって、恐れから解放されたのです。

使徒パウロも同じでした。彼は教会を迫害し、信者を捕まえては牢に送り込んだ人物です。ところがキリストは、そんな彼をも捕らえて離さず、ご自分の使徒とされました。パウロもまた、神の主権、力、栄光だけでなく、神の愛とあわれみ、恵みを知る人でした。彼は、その愛を、ローマ 8 章で、こう賛美しています。

31, では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。

32, 私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

33, 神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。

34, 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

35, 私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。

36, 「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。

37, しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

38, 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、

39, 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

パウロはキリストの愛を知ることによってすべての恐れから解放されました。「キリスト・イエスにある神の愛」を知る者は、このコロナ禍の中にあっても、神が、「われらの避け所、また力」であることを知ることができるのです。知るだけでなく神が「苦しむとき、そこにある強き助け」であることを体験するのです。そして「それゆえ、われらは恐れない」と言うことができるようになるのです。